

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
C141	17-314	慶應義塾大学 加藤眞三
題名(原題/訳)		
Exercise as adjunctive treatment for alcohol use disorder: A randomized controlled trial. アルコール使用障害の補助的な治療としての運動:無作為対照臨床試験。		
執筆者		
Roessler KK ¹ , Bilberg R ² , Søgaard Nielsen A ² , Jensen K ³ , Ekstrøm CT ⁴ , Sari S ^{1,2} .		
掲載誌		
PLoS One. 2017 Oct 19;12(10):e0186076.		
キーワード		PMID:
アルコール使用障害、運動、アルコール消費量		29049336
要旨		
<p>目的: 外来患者アルコール治療の補助的手段としての身体活動が影響を及ぼすかどうか、6 ヶ月間の運動介入へ参加後、そして、治療開始の 12 ヶ月後にアルコール消費に調べる。</p> <p>方法: 本研究は、3 腕の無作為無作為化試験である:患者は(A)通常通り治療群、(B)治療通常通りに監督下のグループ運動割り当て群、(C) 通常通り治療と個人の運動群に割り振られた。第1評価尺度は介入の治療スタート後 6 ヶ月後の多飲と介入の完遂であった。ロジスティック回帰モデルは 3 つの群の間で多飲の確率を評価するのに用いられ、intention-to-treat ものに基づいた。全 3 群の身体活動のレベルの変化は全般的線形混合モデルを用いて検査された。複数線形モデルが身体活動量とアルコール消費の間に関係があったかどうか調べるのに用いられた。</p> <p>結果: 合計 175 例の患者 (68.6%が男性)が参加した。反応率は 6 ヶ月後追跡調査で 77.7%、12 ヶ月後で 57.1%であった。グループ運動群の多飲のためのオッズ比(OR)は 0.99 [95%信頼区間 CI: 0.46;2.14]、p = 0.976 であり、個人運動群では 1.02 [95%CI:0.47;2.18]、p = 0.968 であり、それは参照としての対照群と比較して統計学的に有意差はなかった。適度なレベル身体活動をもつ参加者は低レベルの身体活動をもつ参加者に比べて OR 0.12 [0.05;0.31] p < 0.001 と低いオッズであった。介入群のアルコール消費の量は増加した運動日数1日につき 4%減少した [95%CI: 0.03;6.8] p = 0.015。</p> <p>結論: 飲酒結果に関する運動の直接的効果は見つからなかった。適度なレベル身体活動は治療の後の多飲を予防した。飲んでる結果に関する運動の用量反応効果があるため、アルコール使用障害の患者の治療では身体的に活動的なライフスタイルを実施する必要がある</p>		